http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.439　18/11/08

統計学的事実？

『現代思想講義』（船木亨、2018、ちくま新書）という本を読んでいるのだが、統計学が現代の社会にどのような影響を与えたのかという部分が、まさに現在の状況と重なる気がするので引用してみよう。

＊

近代の民主主義は、社会が個人から成り立っていると前提し、各人の政治的意識に働きかけ、その応答としての「国民の意見」を得ることによって、正しい政治が機能するとみなしていた。しかし、もはや各人の意識はどうでもよい、群れとしての社会のひとびとの発想や行動を調査して、条件を変えてその変数を操作した場合に、賛同されるという調査結果が出ることが、正しい政治であると考えられるようになった。社会とはポピュレーション（人口）、個々の数値を関数的に操作すべき母数なのである。

そこでは、ひとびとがどう考えているかよりも、どういう政策が、ひとびとのどのような行動を社会に生じさせたのかの統計と、ひとびとが政策に賛同しているかどうかの世論調査の統計が重要になる。

こうした統計があきらかにするのは「正しい意見」ではないのはあきらかであるが、ひとびとは、その調査結果が自分の意見に反している場合でも、それで不正が行われているとは考えない。政治リーダーたちは、その数字を操作して、自分たちに都合のよい資源の配分を行っているのにほかならないのだが、他方、かれらもまた、統計でとられた支持率が低下するだけでその立場を追われることになる。

そしてもし、かれらが、支持率の上がることばかりを考えるようになるとすれば、それがポピュリズムをもらたすのであろう。さらにもし、支持率が上がることを通じて、パラノイアのエリートたちが登場してくるとしたら、それがファシズムを生み出すのではないだろうか。

実際、ヒトラーが、1923年、ミュンヘンのビアホールで、「ユダヤ人移民が流入してドイツ経済が崩壊しつつある」と演説し、「ユダヤ人を排斥しろ」と絶叫したということは、よく知られている。ミュンヘン一揆である。ハッキング（保戸塚注：カナダの哲学者）は、そのとき、実際にはユダヤ人移民の統計がとられてはいなかったことを指摘している。

これは象徴的な事態である。というのも、そこに出現していたのは、因果論に基づく歴史的事実に依拠するのではなく、統計学的事実に依拠する現代の思考様式（エピステーメー）だったのだからである。

ヒトラーの演説に対しては、そのときだれかが「ヒトラーは嘘つきだ」と告発すべきだったのであろうか。否、当時のひとびとも、おそらくは、それをしようとはしたのである。だが、ヒトラーのような人物は、歴史的事実や言語表現の真実など、はなから問題にしてはいなかった。どんなフレーズがひとの心を捉えて、信念を自分と共有させるかをしか考えてはいなかったし、聞くひとびとは、統計がありそうだと思うだけで、事実であると判断してしまったのだろう……それが統計学的事実の特性なのである。（pp470-472）

＊

ヒトラー？トランプ？　いやはや…。